

朱権『活人心』の朝鮮と日本における伝播

—— 諸本の比較を通して ——

劉 青

京都大学大学院 共生文明学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 明代において、養生学は前代よりさらに発展し、印刷出版技術も高度に成長を遂げた。それに伴い、官刻とともに私刻、坊刻が盛んになり、多くの医学書、養生書が著され、これらの文化は一般民衆の生活に深く影響を及ぼした。当時において、中国と朝鮮の医学交流は非常に頻繁になされており、多くの医学書が朝鮮に伝来した。日本においては、朝鮮や中国から伝来した医学書を通して、知識人たちは競うように最新の明医学を導入し、それに伴い明医書の翻刻と出版も盛んに行われ、明医学は日本の江戸医学にも影響を与えた。概して明代医学書は、明清医学の周辺地域への伝播及びその学的発達を考える上で重要な位置を占めている。しかし、明代の医学書、特に養生書の東アジア医学史における位置づけの問題については未だ解明されていない点も多い。

本稿では、明初の王室貴族朱権に着目し、中国で刊行され、朝鮮、日本で広範に読まれた彼の養生著作『活人心』を手がかりに、諸本の網羅的な研究によって、上で述べた問題を解決することを目的とする。まず、筆者は各地に散在している『活人心』を集め、系統的に分類、整理した。そして刊刻地域、蔵書印、序文跋文等に基づき、それぞれの性格を明らかにした。次に、朝鮮や日本で書かれた養生著作に注目し、それらと『活人心』の書承関係について分析した。引用書に選別された部分から本書の受容について検討を試みた。最後に、諸版本の性格と他国医学著作の書承関係を踏まえ、『活人心』の流布経路の素描を試みた。特に、現在でもよく用いられる朝鮮版本を中心に考察し、成書経緯を推定した。

朱権の思想は、伝統的な養生史に新たな方向性を与えたと言えることができる。そのため、『活人心』の位置づけによって、東アジア全体における養生思想の特徴と展開を窺い知ることができる。朝鮮、日本における『活人心』及び明初の養生思想の具体的な受容と、その朝鮮化、日本化における独自の展開については、今後検討していくべき課題である。

は じ め に

中国では医学薬学の進展に合わせて、明代からとくに養生書が数多く現れる。その背景には、社会経済の安定と生活の向上とともに、長寿術といった具体的な長寿延命法への関心が高まったことが挙げられる。現代にいうところの健康増進や健康維持に関わる考えや方法は、いわゆる「養生」と総称されるが、その思想は養生書という書

物を通じて、朝鮮、日本にまで浸透してゆく。

日本では江戸時代を通じて、食養生、八段錦、六字呼吸法などの概念が養生書のなかで用いられるようになっていく。貝原益軒(一六三〇—一七一四)の『養生訓』に代表されるように所謂「養生思想」に関する著書が多数出版されている。こうした状況は朝鮮半島においても同様であった。たとえば朝鮮半島の医学百科書『医方類聚』は当時代の養生思想を代表する著述であるが、唐から明初にかけての中国医籍からの引用が無数にある。

養生思想の拡がりを考える際、朱権（一三七八—一四四八年）は重要な人物の一人である。朱権は、明の太祖朱元璋の第十七子（一説に第十六子）で明代を代表する文人でもある。朱権は、自らくせん隴仙と号し、涵虚子、丹丘先生の別号もある。一三九一年に寧王に封ぜられ、大寧（現在、内蒙古赤峰市宁城县）に居をかまえていた。朱元璋の没後、建文帝により王位を剥奪され、永楽帝の時、南昌に移された。晩年は道教を志し、文化人として道教、養生、劇曲についての著作を多く残した。彼の医学養生関係の著作は『活人心』『寿域神方』『乾坤生意』『神隱』『救命索』『運化玄枢』『庚辛玉冊』『乾坤生意秘韞』で、刊刻した医学書は『神応経』『十葉神書』『素問病機気宜保命集』『小兒靈秘方』である。

上の中で、養生思想を展開させた書物として最も注目されるのは『活人心』である。二巻本（明刊本）で上巻は養生法について述べられている。養生法というのは健康増進のための呼吸法、体操、食事や日常生活の留意点など生活全般に関わる健康術である。下巻は薬方であるが、こちらは薬の調剤調合の具体的なあり方を示したものであって、朱権が独自開発した薬方から、小柴胡湯や四物湯など現在にもなじみのある薬方に至るまで、いずれかといえば本草学的知識を前提にした記述である。

上巻は「中和湯」「和気丸」「養生之法」「治心」「導引法」「去病延寿六字法」「保養精神」「補養飲食」の八つの部分で構成されている。下巻は主要な内容として、「玉笈二十六方」と「加減靈秘十八方」があり、それぞれに二六種類薬方や一八種類薬方が記されている。これらは『活人心』諸本（零本を含む）に概ね共通している。ところが、この書物の書誌情報はなお十分に共有されておらず、養生思想の伝播を考える上で重要な書物であることは知られているものの、その本文系統についての検討にはなお問題が残っている。

現在、残存する『活人心』は系統的に五種ある。各系統を代表するもので示すと次のようになる。なお詳細は後述する。

- ① 明刊本 『子海珍本編 台湾卷』第二十六冊（2013 中央研究院歴史語言研究所，台

湾商務印書館）

- ② 朝鮮安珪跋本 『北京大学図書館館蔵善本医書』第四冊（1988 中国古籍出版社），『新刊京本活人心方 神仙服餌 医学源流短要方』（1987 新文豊出版社）
- ③ 朝鮮慶州本 『中国養生叢書』シリーズ第一輯（1988 谷口書店）
- ④ 日本早稲田本
- ⑤ 江戸写本

葉明花氏（2009）¹⁾ は朱権の生涯や著作を主題とし、彼の医学養生の著作を網羅的に紹介している。葉氏の研究の第三章第一節では、当該書の朝鮮安珪跋本に基づき、本書の内容考証を行っている。葉明花・蔣力生（2016）『朱権医学全書』（中医古籍出版社）は②朝鮮安珪跋本・④早稲田本を用いて校勘を行っている。それ以外にも、韓国では Geon Su Cha, Jeong Wan Gim (2000) 「The philosophy of Toe-gye and the meaning of health in Hoal-In-Sim-Bang」 (『The Korean Journal of Physical Education』), Choi Bong-geun (2005) 「A study on Toe-gye's Hoal-In-Sim-Bang」 (『The Korean Society Of Yang-Ming Studies』) の研究成果があるが、『活人心』についての系統的な先行研究はほとんどないのが現状である。日本での本書に関しての研究は三木栄氏の『朝鮮医書誌』にある二つの朝鮮本と日本の早稲田本についての書誌情報や²⁾、『中国養生叢書』シリーズ第一輯石田秀実氏の「『活人心法』解説」以外、見いだせない。すなわち、本書の伝播経路及び諸本対校についての考察やその内容の検討は未だ十分に行われていないといえる。

本稿では、近世養生思想の実態について、明初の養生書『活人心』を皮切りに諸本系統の書誌情報を今一度整理し、その刊行の経緯と伝播の実態を探りつつ、本書の内容や当時の日本・朝鮮での養生思想の受容史を分析する。これは受容する側の傾向分析であるとともに、東アジア的な養生思想の展開が後世にどのように影響したかを考える上での基礎研究として行うものである。

第一章 『活人心』諸本系統の分類

『活人心』の諸本について、本稿では、内容に関わらない字体の異同（異体字）、書体の異同（おそらく刻板が異なる）をひとまず措いて、それらを同一種とみなし、刊行された地域及び、内容に関わる具体的な異同に基づいて分類を試みた。全文を実見できていないものもあるが、影印本及び Web 上に公開されている写真データによって検討を試みて明刊本、安珪跋本、慶州本、早稲田本、江戸写本の五種類が確認できた。このうち、最も古いと思われる ①明刊本を底本として、②安珪跋本、③慶州本、④早稲田本との校合を行った（校勘内容は附録に参照³⁾）。書誌情報や文字異同から見た書承関係を素描したい。

①明刊本 台湾中央研究院歴史語言研究所傅斯年圖書館蔵

本書現状：①明刊本について筆者は原物の全本を実見できなかったため、台湾中央研究院歴史語言研究所の提供を許可した原本の序文一丁オ、上巻の一丁オ、下巻の一丁オ、書末終丁ウの写真と影印本を検討した結果、書誌は次の通りであった。線装。每半葉約 19.5×13.7cm（内寸）。四周双辺有界（序文の部分は無界）。版心丁付上下黒魚尾。版心書名は判読できない。訓点（返り点）がある。頭注に後人の書き込みあり。序文一葉目に印記二箇所があるが判読できない。巻頭一葉目に蔵書印三個。「史語所改藏珍本圖書」「傅斯年圖書館」「東方文化事業総委員会蔵図書印」と読める。序文の最後に朱権の押字が二箇所あり、そのうちの一つは朱権がよく用いた概念である「神」あるいは「中和」の字と似ている。

構成：書名『活人心』。書首に朱権の自序がある。目次はない。上巻・「中和湯」「和氣丸」「養生之法」「治心」「導引法」「去病延寿六字法」「保養精神」「補養飲食」の八項目、下巻・「玉笈二十六法」「加減靈秘十八法」の二項目がある。

後述するが、筆者の調査によれば、①明刊本は三一丁ウと三二丁オの内容に連続性がない。つまり、他の②③④⑤の版本と比較すると、下巻



明刊本『活人心』（台湾中央研究院歴史語言研究所蔵品）

「加減靈秘十八法」の部分の薬方「小柴胡湯」の文は途切れており、あとの薬方「不換金正散」から「四物湯」にかけて該当丁が欠丁しており、「四物湯」の一部分のみが残存する。その残存部分の最後に「心巻下 終」と刻されており、後人による原文の取捨、加筆の跡が窺える。

②朝鮮安珪跋本（以下安珪跋本と略称する）

a 北京大学図書館、b 台湾故宮国立博物院蔵

本書現状：a 北京大学本は二巻一冊、線装。四周双辺有界。版心丁付上下黒魚尾。版心書名「心方」。訓点及び書き込みがない。北京大学本は「北京大学蔵」という印記が巻首と巻末に一箇所ずつある。

b 故宮本は二巻一冊、線装。每半葉約 23.3×16



朝鮮安珪跋本『新刊京本活人心法』（北京大学図書館蔵写真は中国古籍出版社『北京大學圖書館館藏善本醫書』第四冊により）

cm (内寸)．四周双辺有界．版心丁付上下黒魚尾．版心書名「心方」．日本人の手による訓点がある．扉に楊守敬の写真蔵書票が貼ってある．序文一葉目に印記が六箇所ある．その内の四つは楊守敬のもので、「楊守敬印」「宜都陽氏蔵書記」「星吾海外訪得秘笈」「楊守敬印」と判読できる．巻末には印記が一箇所ある．楊守敬（一八三九—一九一五）は清末の学者．字は惺吾，号は鄰蘇．湖北省宜都の出身．観海堂は楊守敬の蔵書号．彼は明治一三—一七年（一八八〇—一八八四）に来日し，中国で散佚してしまった古籍を収集し，約三万冊を持って帰国している．一九一五年に楊守敬が没した後，観海堂蔵書は民国政府に買い上げられ，松坡図書館と集靈園に分蔵，さらに北京の故宮博物院に収蔵された．故宮のはちに上海・南京・重慶と国民党政府の移動にともない，一九四九年には台湾へ移転され，一九六八年より台北の故宮博物館に収蔵されている⁴⁾．従って故宮本はもともと日本にあり，楊守敬によって持ち帰られたものである．ほかに成賞堂文庫にも一本があることがわかっているが，筆者は未見であるため，詳細は本稿では取り扱わない⁵⁾．



朝鮮安珪跋本『新刊京本活人心法』（台湾国立故宮博物院蔵 写真は台湾国立故宮博物院公式サイト）

構成：書名『新刊京本活人心法』．書首に朱権（篇末題前南極沖虚妙道真君驪仙）自序，目次がある．上巻・「中和湯」「和気丸」「養生之法」「治心」「導引法」「去病延寿六字法」「保養精神」「補養飲食」，下巻・「玉笈二十六法」「加減靈秘十八法」．

北京大学本の書末には附録・「香薷散」「椒鼓元」という薬方が添付されている．嘉靖二〇年（一五四一）安珪（一五〇一—一五六〇）の跋文がある．安珪の跋文には詳細な刊刻経緯が載せられていないが，「遂寿諸梓」（諸版本を刊刻した）と記されている．安珪は，字は仲珍，号は雪江，順興の人．官位は左議政にまで昇っていた．医方に精通し，内外医局を領し，明宗一五年卒．『明宗実録卷』の記録によれば，明宗の時には安珪に医院の教育を担当させたという⁶⁾．中宗が病に悩んでいた時に，薬房の提調（官名）が安珪の医術が精妙であるから王の病状について安珪を呼んで議論するよう，上奏したことがある⁷⁾．

跋文の後に薬方「黄耆湯」と無記年の山溪山人の「跋」半葉も収録されている．山溪山人の解説によれば，「香薷散」「椒鼓元」「黄耆湯」は後に添加した薬方である．刊行年代は嘉靖二十年（一五四一），すなわち朝鮮中宗三六年，もしくはそれ以後の本であると推測できる．整版で朝鮮初刊本と推定される⁸⁾．

故宮本は北京大学本と同一であるが，下巻末に附録として「香薷散」「椒鼓元」という薬方が添付されている．しかし，安珪跋文の部分は落丁してしまっており，「黄耆湯」の一部分と山溪山人の解釈文のみ残っている．

③朝鮮慶州本（以下慶州本と略称する）a 日本宮内庁書陵部，b 東京大学総合図書館蔵

本書現状：a 書陵部本は二巻一冊，線装．每半葉 24.3×16.5 cm (内寸)．四周单辺有界．版心丁付上下黒魚尾．版心書名「活人心」．朱墨書き入れがある．訓点がある．書陵部本の序文一葉目に印記が八箇所ある．そのうちの七つの蔵書印は「帝国博物館図書」「大学東校典籍局之印」「江戸医学蔵書之印」「保静堂蔵」「耐辱居士」「安東大猷後学金直哉景魚章」「多紀蔵書」の印である．残りの一つは判読できない．書末には「存誠藥室」と香炉形の「康寿」の印記がある．本刊本は慶州で新しく刷られたものとみられ，蔵書印からは一時期安東金氏一族の子孫金直哉（一五五四—一六一二）の手に渡っていたことが分かる．「耐辱居士」は朝鮮の内丹学に造詣の深い北窓鄭礪

(一五〇五—一五四九)と親戚関係にある鄭磻(一五二六—?年)の可能性もある。鄭磻の号は耐辱居士であった。朝鮮の文臣であり、温陽鄭氏、知中枢府事を歴任した鄭百朋の子であり、末年に府使の職を辞退し、楊州(ソウルの東北)の逍遙山に隠居したという⁹⁾。「多紀蔵書」は、江戸時代末期の幕府医官多紀元堅(一七九五—一八五七)の蔵書印であり、本書が日本に伝来してから、多紀元堅の所蔵となったことが知られる。「存誠藥室」も多紀元堅の号である。



朝鮮慶州本『活人心法』(日本宮内庁書陵部蔵)

b 東大本は二巻二冊、線装。每半葉約 24.8×16.4 cm (内寸)。四周单边有界。版心丁付上下黒魚尾。版心書名「活人心」。朱墨書き入れがある。訓点がない。脱字の箇所後に人の書き入れがある。東大本の序文一葉目に印記が六箇所ある。押印された蔵書印は「三井家」「画餅居士蔵書之印」「森氏開万冊府之記」「養安院蔵書」「養安」「東京帝国大学図書館」である。書末には「大正十四年所得」の印記がある。「養安院蔵書」「養安」の蔵書印から明らかなように、安土桃山・江戸初期の医学者である曲直瀬正琳(一五六五—一六一一)の架蔵本と考えられる。彼は宇喜多秀家夫人の病を治し、宇喜多秀家が非常に喜び、その功により朝鮮の役に獲得した数百巻書籍を彼に賜っている。彼の蔵書には数多くの朝鮮本がある¹⁰⁾。この本も文禄・慶長の役(一五九二—一五九三、一五九七—一五九八)時の伝来本である可能性が高い。その後、文人中島棕隠(一七七九—一八五五)、書誌学者森立之(一八〇七—一八八五)、実業家

三井高堅(一八四九—一九一九)を経て、東京大学の蔵になったと思われる。



朝鮮慶州本『活人心法』(東京大学総合図書館蔵)

構成：書名：『活人心法』。書首に朱権(篇末題前南極沖虚妙道真君臞仙)自序、目次がある。上巻・「中和湯」「和氣丸」「養生之法」「治心」「導引法」「去病延寿六字法」「保養精神」「補養飲食」。下巻・「玉笈二十六法」「加減靈秘十八法」。書末に「嘉靖庚戌歲 慶州府新刊」という奥付があることから、李氏王朝・明宗五年(一五五〇)に刊行されたことが分かる。

④日本早稲田本 (以下早稲田本と略称する) 早稲田大学中央図書館蔵

本書現状：三巻一冊、線装。每半葉約 21.2×13.5 cm (内寸)。四周双边無界。訓点がある。版心丁付上下花魚尾。版心書名「臞仙活人心」。序文一葉目に印記が四箇所ある。押印された蔵書印は「早稲田大学図書館」「森氏」「明治四拾年四月三十日/購□」「喜多村氏蔵書之印」である。江戸の国学者喜多村信節(一七八四—一八五六)、書誌学者森立之(一八〇七—一八八五)の架蔵であったことが分かる。

構成：書名：『臞仙活人心法』。書首に朱権(篇末題前南極沖虚妙道真君臞仙)自序、目次あり。上巻・「中和湯」「和氣丸」「養生之法」「治心」「導引法」「去病延寿六字法」「保養精神」「補養飲食」。しかし「和氣丸」と「養生之法」の間に「六字法」という題目が付けられている。中巻・



日本早稲田本『麗仙活人心法』（早稲田大学中央図書館蔵）

「玉笈二十六法」下巻・「加減靈秘十八法」。他の版本と異なり、本書だけが三巻に分けられている。書末に「嘉靖庚戌歲 慶州府新刊」という奥付が残され、刊行元である「寺町三条上町 山本五兵衛尉 刊校」と落款された跋文が付いている。版元の跋文は次のように読める。

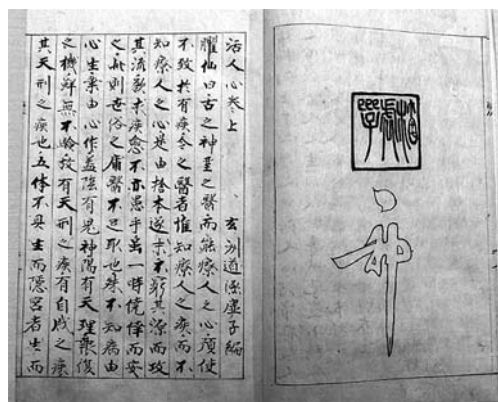
「此一篇者涵虚子道人之所著也。顧其書，人身養生延命之根本也。蓋所載之藥方，雖不盈於五十而濟天下之夭瘥，不可勝言，然世人未及知之。是故今刻梓以廣其傳。云／＼□□（承応）貳癸巳曆／九月吉日」寺町三条上町／山本五兵衛尉刊板」

（此の一篇は涵虚子道人著す所なり。其の書を顧みるに、人身養生延命の根本なり。蓋し、所載の藥方五十に盈たずと雖も天下の夭瘥^{ようさ}を濟ふこと勝^{すぐ}へて言ふべからず。然るに世の人未だ之を知るに及ばず。是の故に今梓^{はんぎ}に刻んで以て其の傳^{でん}を廣むと云ふ。）

以上の跋文によって、承応二年（一六五三）九月、寺町（京都）の山本五兵衛により、上記の「朝鮮慶州本」を底本として覆刻されたことがわかる。慶長年間（一五九六—一六一五）には、本を出版し店頭で販売する本屋（書林）が現れた。その後、多くの本屋が出揃い、次第に書林たちは分野別（儒書、仏書、医書、歌書など）に専門書を刊行することになった。山本五兵衛は約慶安五年（一六五二）から元禄三年（一六九〇）の間、京寺町通り三条上ル本能寺前に存在した書林である¹¹⁾。

⑤江戸写本 日本内閣文庫蔵

本書現状：二巻一冊，線装，四周単辺有界。每半葉約 26.2×17.5 cm（外寸）。版心書名「活人」。朱の句点がある。蔵書印はない。序文の最後に①明刊本と同じく朱権の押字が二箇所にある。内閣文庫の書誌情報には「江戸初写本」とある。



江戸写本『活人心』（日本内閣文庫蔵）

構成：書名『活人心』。書首に朱権の自序がある。上巻・「中和湯」「和気丸」「養生之法」「治心」「導引法」「去病延寿六字法」「保養精神」「補養飲食」。下巻・「玉笈二十六法」「加減靈秘十八法」とある。注意すべきは落丁がない点である。

以上の書誌情報を一覧表にすると、以下（表1）のようになる。

第二章 校合による諸版本の書誌検討

なお当該書の書名について、「活人心法」は常用の書名であるが、蔵書目録や上記の諸本によって「活人心」「活人心方」「新刊京本活人心法」「麗仙活人心法」という書名も用いられている。明刊本では、序文の題目に「活人心序」、序文のなかに「編為上下二巻，目^あテ之曰活人心ト」（編みて上下二巻と為し、之を目^{なづ}て活人心ト曰ふ）とある。上下巻の巻頭書名はそれぞれ「活人心巻上」「活人心巻下」である。序文に「今其^{いま}の二家^{そにか}（筆者注、神仙術と医術）の説を述べ、自ら一家^{みづか}の新話を成し、編みて上下二巻と為す。之を目^{すく}て活人心と曰ふ。謂へらく、人を救ふ心を長存し、

表1 各版本書誌情報

	①明刊本	②安珰跋本 (a)	②安珰跋本 (b)	③慶州本 (a)	③慶州本 (b)	④早稲田本	⑤江戸写本
書名 (巻頭)	活人心	安珰跋本	新刊京本活人心法	活人心法	活人心法	臚仙活人心法	活人心
書名 (版心)	無	心方	心方	活人心	活人心	臚仙活人心	活人
著者名	玄州道神涵虚子	玄州道神涵虚子	玄州道神涵虚子	玄州道神涵虚子	玄州道神涵虚子	玄州道神涵虚子	玄州道神涵虚子
序跋	自序	自序, 跋文	自序, 跋文 (aより落丁)	自序	自序	自序, 跋文	自序
目次	無	有	有	有	有	有	無
巻数	上下二巻	上下二巻	上下二巻	上下二巻	上下二巻	上中下三巻	上下二巻
抄刊	刊本	刊本	刊本	刊本	刊本	刊本	抄本
訓点/注釈/書き込み	訓点がある, 頭注に後人の書き込みあり.		無訓点がある.	訓点がある. 朱墨書き入れがある.	無	訓点がある.	無
刊刻年代	不明	1541 (或いはそれ以後)	1541 (或いはそれ以後)	1550	1550	1653	不明
刊刻地	不明	不明	不明	慶州府	慶州府	寺町 (京都) の山本五兵衛	不明
蔵書印	巻首五個 (「史語所蔵珍本圖書」「傅斯年圖書館」「東方文化事業総委員会蔵圖書印」二個不明)	巻首一個 (「北京大学蔵」)	巻首五個 (「楊守敬印」「星吾海外訪得秘笈」「宜都陽氏蔵書記」二個不明)	巻首八個 (「帝國博物館圖書」, 「大學東校典籍局之印」, 「江戸医学蔵書之印」, 「保静堂蔵」, 「耐辱居士」, 「安東大猷後学金直哉景魚章」, 「多紀蔵書」一個不明) 巻末二個 (「存誠業室」, 「康寿」)	巻首六個 (「三井家」, 「画餅居士蔵書之印」, 「森氏開万冊府之記」, 「養安院蔵書」, 「養安」, 「東京帝國大學圖書館」) 巻末一個 (「大正十四年所得」)	巻首四個 (「早稲田大學圖書館」「森氏」「明治四拾年四月三十日/購」)「喜多村氏蔵書之印」)	無
影印版出版情報	『子海珍本編台湾巻』第二十六冊 (中央研究院歴史語言研究所, 台湾商務印書館二〇一三)	『北京大学圖書館館蔵善本医書』第四冊 (中國古籍出版社一九八八)	『新刊京本活人心方 神仙服餌医学源流 短要方』 (新文豊出版社 1987)	『中国養生叢書』シリーズ第一輯 無 (谷口書店 1988)	無	無	無

人の生を全うし、同じく寿域に帰せんと欲す」(今述其二家之説, 自成一家新話, 編為上下二巻, 目之曰活人心, 謂長存救人之心, 欲全人之生, 同歸於寿域也)と記されている。現在, 台湾中央研究院に所蔵されている①明刊本は原刻本であるのか否か証明できないが, 内容的に一番原刻に近いと考えられるので, 本書の原題も明刻本の書名の通り「活人心」とみてまず問題がない。

「活人」という言葉は、『莊子』外篇「至楽」に「吾未だ善の誠に善なるか, 誠に不善ならざるかを知らず。若し以て善となさば, 身を活かすに足らず。以て不善となさば, 以て人を活かすに足れり」という文がある。初めて医学書のタイトルとして「活人」が現れたのはおそらく朱肱(一〇五〇—一一二五)の『南陽活人書』(『類証活人書』『傷寒類証活人書』という書名もある)であると考えられる。華佗(?年—約二〇八)は張仲景(一五〇年?—二一九年)の『傷寒論』を「活人

書」と指摘し, 朱肱はその言葉を使って書名にしたと考えられる¹²⁾。次に, 劉信甫(南宋)の医学書に『活人事証方』という題目が使われた。作者の自序によれば「活人」の意味は「庶使此方以活天下。庶うに此の方を以て天下を活かしむ」と解釈されている。その後, 元代の曾世榮(一二五二—一三三二年)が『活幼心書』というタイトルを使った。彼はこの書の序文で書名中の「心」の意味を次のように説明した。

天向一中分造化, 人於心上起經綸。大哉心乎, 其万事之機括乎。前乎千百世而上, 為天地立心, 生民立命者, 此心也。然昔賢之学, 固以心而傳, 而昔賢之心, 非書又無以衍其傳。上探三皇前哲之遺意, 下探克臣茂先之用心, 實則吾心固有之理, 旁求当代明医之論, 亦姑為活幼之一助云爾。遂名其書曰『活幼心書』。

「天 一中に向いて造化を分かち, 人 心上に於いて經綸を起す。大なるかな心や, 其れ万事

の機括なるか、前なるか千百世にして上、天地のために心を立て、生民 命を立つ者は、此の心なり。然れども昔賢の学、固より心を以て傳え、而るに昔賢の心、書に非ざれば又た以て其の傳を衍す無し。上は三皇前哲の遺意を探り、下は克臣茂先の用心を探る。実に則ち吾心固有の理、当代明医の論を旁求し、亦た姑く幼を活かすに一助と為すと爾云ふ。遂に其の書に名づけて『活幼心書』と曰う。」

つまり、「心」の作用を重視して患者の「心」を観察しつつ、治療することに関しては用心すべきだと説いている。筆者の目的は、先賢医家の心伝を体得した上で、自分の発見を述べることである。疾病と治療に関する主張は朱権と非常に近いと考えられる。そのため、「活人」とは「人を活かす」もしくはより使役的に「人を活かしめる」ここで他人の命を救うことを意味しており、「心」とは「先哲の遺訓」や「己の体得」を指していると考えられる。

なお、以上のことから、まず、刊行年代をみると、①明刊本は年代不詳、②安珰跋本は一五四一年或いはそれ以前、③慶州本は一五五〇年、④早稲田本は一六五三年、⑤江戸写本は一六六〇年代以後と断定される。明刊本以外、現時点で確認できる一番古い版本は②安珰跋本である。引用された他の医学書の年代を考え合わせると、朝鮮の伝本は日本の伝本よりも刊行年代が早く、『活人心』の朝鮮への流入時期は日本より早かったとみて間違いない。

そこで①明刊本を底本として、各版本を比較してみると、用字などの異同と薬方の変更に關して、②安珰跋本、③慶州本、④早稲田本はかなりの出入りがある（付録参照）。

②③④の版本と①底本の異同は合わせて約二百ヵ所確認できた。②安珰跋本、③慶州本と底本①明刊本を比較すると、②安珰跋本、③慶州本には単純な誤字、脱字、衍字だと考えられる箇所だけでなく、明らかに意図的な改竄・改変と思われる箇所が相当数あった。例えば次のようなものがあげられる。

I 底本上巻 8 丁ウ 5 行目

中和湯（項目名）：②安珰跋本は底本に同じ。

③慶州本・④早稲田本「保和湯」に作る。

底本上巻 10 丁オ 3-4 行目の間

底本と比べて、③慶州本、④早稲田本「六字訣」という副タイトルを書き加えた。②安珰跋本は底本に同じ。

II 底本下巻 7 丁ウ 4 行目

右薬末和勻、用紅棗不拘多少：②安珰跋本「右為末用紅棗二十粒」に作る。③慶州本、④早稲田本は底本に同じ。

III 底本下巻 25 丁ウ 2 行目

棗一枚煎：②安珰跋本、③慶州本、④早稲田本「棗一枚水鐘半煎至七分」に作る。

IV 底本下巻 26 丁オ 4 行目

加肉豆蔻：②安珰跋本「加肉豆蔻二錢」に作る。③慶州本、④早稲田本「加肉豆蔻二錢及訶子」に作る。

以上、②安珰跋本と③慶州本、④早稲田本がそれぞれ独自に改変したと見ることもできるが、これら三種のうち②安珰跋本と③慶州本は底本①明刊本とは異なる別本を参照して刊行された可能性が高いと考えられる。つまり、現在、台湾中央研究院に所蔵されている①明刊本と、②安珰跋本、③慶州本、④早稲田本との直接的な書承関係はないものと推測できる。

ところが、校勘結果から見ると、②安珰跋本と③慶州本、④早稲田本は底本からの改竄・改変はほぼ下巻の薬方部に集中し、上巻に対する改変はほとんどなかった。しかも、薬方に対する改変について、二つの朝鮮本はただむやみに改竄したのではなく、薬方の臨床のうえで、修正した蓋然性が高い（例Ⅱ、Ⅲ）。

さらに②安珰跋本と③慶州本の関係は、直接的に慶州本が安珰跋本を参照していないようにも見えるが、例Ⅲ、Ⅳに挙げたように、③慶州本ではそのまま②安珰跋本の改変を継承した箇所や、②安珰跋本の改変した上にさらに手を加えた箇所も見つかった。要するに、刊刻時代が比較的遅かった③慶州本は、②安珰跋本を参考しつつ、更に工夫が加えられた著作だと推測できる。

また、前述の通り、④早稲田本は③慶州本をもとに刊行されたことがほぼ確実であり、③慶州本の異同はそのまま④早稲田本に継承されている。

なお、本稿では具体的に江戸写本の文字異同を検討しないが、版本についてふれておく。江戸写本も「活人心」という書名を用いている。江戸写本には書写時に判読できない文字を空欄にしたとみられる空白が認められるものの、明刊本と記述箇所が一致していることから、江戸写本はこの明刊本の写しであるとみてよい。つまり、明刊本がそのまま日本にもたらされ、落丁する前に書写されたと考えられる。そのため、明刊本に比して落丁がなく、この写本は原典の復元、他本との校勘に対して重要な意味があると考えられる。

第三章 朝鮮、日本における引用状況

第二章で述べたように、①明刊本と、ほかの版本と直接的な書承関係はないとしたら、①明刊本の流布状況、二つの朝鮮本（②安弦跋本と③慶州本）の成書経路、及び下巻の薬方の部分だけが改編された理由について、まだ不明なところが多い。筆者は現在所知の書誌情報をまとめ、諸本関係の整理を試みたが、書承関係の全体図を描くためにはさらなる検討が必要である。そのため、本章で筆者が発見した限りにおいて朝鮮、日本の養生書における『活人心』の引用状況を探り、さらに書承関係を素描してみたい。

①朝鮮の養生書における『活人心』の引用状況

李氏朝鮮時代において、世宗の時代に刊刻された医学百科書『医方類聚』（一四四五—一四七七）は大量の中国医学書を引用しており、その中に『活人心』からの引用と思われる箇所も多く認められる。

『医方類聚』¹³⁾ の中では、本書の書名は『臞仙活人心方』とされ、引用された部分は以下の通りである。

諸風門 十二（原書卷之二十四）辟異錠子，捉虎丹

傷寒門 三十七（原書卷之六十三）加減玄武湯，五苓散

眼門 七（原書卷之七十）宋真宋皇帝勅封瓊玉膏

齒門 三（原書卷之七十三）神功散
咽喉門 四（原書卷之七十六）玉関金鑰匙
血病門 二（原書卷之八十五）保養飲食（柏湯）

心腹痛門 三（原書卷之九十四）神靈丹
水腫門 四（原書卷之百二十九）丹房奇術不服藥自去水

赤白濁門 二（原書卷之百三十四）天下第一部葉，玉露丸，金鎖丹

諸痢門 六（原書卷之百四十一）感応丹
解毒門 四（原書卷之百六十四）養生之法（酒，茶に関する部分）

癰疽門 九（原書卷之百七十八）玄靈散，天漿膏
膏藥門 二（原書卷之百九十四）神授東華益簞膏

雜病門 三（原書卷之百九十七）至聖來復丹，婦神丹，捉虎丹，靈宝丹

養性門 三（原書卷之二百一）中和湯，和氣丸，養生之法，治心（当該書上巻の前半部）

養性門 七（原書卷之二百五）導引法，去病延寿六字法，四季養生歌（当該書上巻の一部）

内容を見ると、『医方類聚』の「養性門」部分は『活人心』上巻の部分（中和湯，和氣丸，養生之法，治心，導引法，去病延寿六字法，四季養生歌）がほぼそのままのかたちで引用されている。それ以外は、『活人心』下巻の「玉笈二十六方」に対して、二十六方中の十八方が引用されている。とくに、朱権が独自に開発した薬方が重視されている。さらに具体的な内容をテキストで比較すると『医方類聚』の引用部分の文字は①明刊本の文字と一致しているとわかった。

『医方類聚』の刊刻年代と朱権の没年が相当に近いことから、推測すれば、『活人心』は明代に出版されて間もなく①明刊本の形で朝鮮に伝わり、李氏朝鮮時代の医官や貴族階級に広まり、国家的な医学全書に収録されたとみてよい。

その後、李氏朝鮮の儒学者であり、朱子学の集大成者として知られている李退溪（一五〇一—一五七〇）も『活人心』を写している。李退溪は若い頃から病弱であったため¹⁴⁾、養生と医薬を学んでいた。特に、彼は単純な身体治療ではなく、精

神的な修練も重視した『活人心』に関心をもったらしく、『李退溪遺墨 活人心方』は上溪光明堂に収められている。大きさは約45.5×29.5 cmと大型本で、退溪学研究院によって影印本が出版されている¹⁵⁾。李退溪本の影印本によって本文異同を検証すると①明刊本系統のものと最も近い。つまり、①明刊本は朝鮮に伝わり、李退溪の元に収められたことが分かる。

李退溪の『活人心』が上巻のみ残されていることに関して、李退溪が書写した時点ですでに残巻となっていたのか、書写したあとに散逸したのか、詳細は知りえないが、当時の李退溪の地位からして、彼の蔵書の上下巻の下巻だけが散逸する可能性は低いとみられ、やはり李退溪が書写した時点において①明刊本は上巻のみの残巻であった蓋然性が高い。

李退溪本は彼の若い頃の筆跡とされるため¹⁶⁾、いわゆる②安弦跋本、③慶州本より早い時期に書写されたことが分かる。ということは、②安弦跋本と③慶州本を刊刻する前、そのもととなる明刊本が上巻しか残されていなかったと考えられる。その後発になる②安弦跋本、③慶州本は他の新しい祖本を探し、参照せざるを得ない状況になったものと考えられる。第二章でも述べたように、②安弦跋本、③慶州本は①明刊本と比べて、下巻の薬方の部分に対して臨床考察した上での修正が行われたと見られる。つまり、残巻になった明刊本の『活人心』に対して、全文を復元するため、②安弦跋本は①明刊本の様々な逸文を集めたうえで、薬剤となる植物の植生も含めて地域差を考慮しつつ、臨床実験によって得られた知見を勘案して作られたものだと推測したほうが妥当であるといえるだろう。

李氏王朝初期、明に対して頻繁に赴京使行が行われ、医員が随行していた。彼等は、大陸に於いて明医学の状況を見学し薬材・医学書などを将来した¹⁷⁾。地域差があるために、朝鮮の自然環境で明朝と同じ薬剤を入手することが非常に難しかったということが推測できる。明朝から医学書が輸入されたものの、文献に載せられた生薬と同じもの、同じ用量を使うのも困難であったため、当地の医官によって実験の上で薬方を修正したことも

十分考えられる。安弦は医術に造詣の深いエリート官僚であったため、安弦が処方箋を修正した可能性も高いと考えられる。

②日本の養生書における『活人心』の引用状況

以下、日本における『活人心』の出版状況と引用状況を踏まえ、日本における『活人心』の流布について分析してみたい。

清家文庫の『導引纂要』（現在、京都大学富士川文庫収蔵）は、舟橋秀賢（一五七五—一六一四）の自筆による導引養生書である。本書は中国の医学書を参照して養生、導引術や呼吸法を論じたものである。本書中程の「活人心曰」から「不可軽忽」までの約十二葉の部分は、『活人心』上巻の「養生之法」（一部分）、「導引法」、「去病延寿六字法」、「四季養生歌」の内容をそのまま写しており、異同を校勘すると引用部分の用字が②安弦跋本と一致する。つまり本書は②安弦跋本を確実に参照して著されている。

その後、松尾道益（生没年未詳）の『養生俗解集』（現在、京都大学富士川文庫収蔵）も、寛文年間に著わされた。この書は養生理論を分かりやすく平明な文章で述べている。本書の第一章「人常住養之法」に見える「先其身ヲ治メ。其心ヲ正メ。然後心中疑ナク。平生ナス処ノ。過惡ヲ改メクヒ。妄念ヲ放下ス。ナストコロノワザ。天理にカナフトキハ。ツイ二神二通シ。心意清浄ニス。疾病自然ニ安痊也」という文章や、第二章「導引按摩之法」の内容を見るかぎり、編纂の時に『活人心』「治心」の理論、「導引法」節の八段錦が参照、引用されたものと思われる。

その理由は、『江戸時代書林出版書籍目録集成』¹⁸⁾の「寛文無刊記書籍目録」の中に、「三冊活人心」と記されているからである。その後、寛文一〇年、寛文十一年、延宝三年、元禄五年、元禄一二年、天和元年、元禄九年・宝永六年、正徳五年の目録にはすべて「三冊 活人心 涵虚子編」の記録がある。以上刊刻された各版本の行方は現在不明であるが、一六七〇年から一七一五年の間に私家版を除く坊刻本だけで『活人心』が九回あるいはそれ以上にわたって刊刻されている。以上の版本すべての書名は「活人心」であること

は、明刊本の書名をそのまま使ったと言えるだろう。それに、すべては三冊本であることは、以上の版本の内⑤早稲田本のみが三巻本であるため、⑤早稲田本の内容でも参照したのだろうか。江戸時代の大半、即ち寛文～正徳に亘る約半世紀、書林は数多く需要者に対して『活人心』を引き続き刊刻、販売していたとみて大過ないであろう。

なお、明刊本について附言しておく。現在、筆者が発見した明刊本以外に、当時ほかの明刊本が存在していたという可能性が高いと見られ、もしほかの明刊本が発見された場合、他の刊本との書承関係もちろん多少変わるが、本稿では現存する版本を対象とし、それらの関係性を検討するにとどめる。

これまでの検討からわかるとおり、諸版本の伝播関係を下图(図1)のようにまとめることができた。

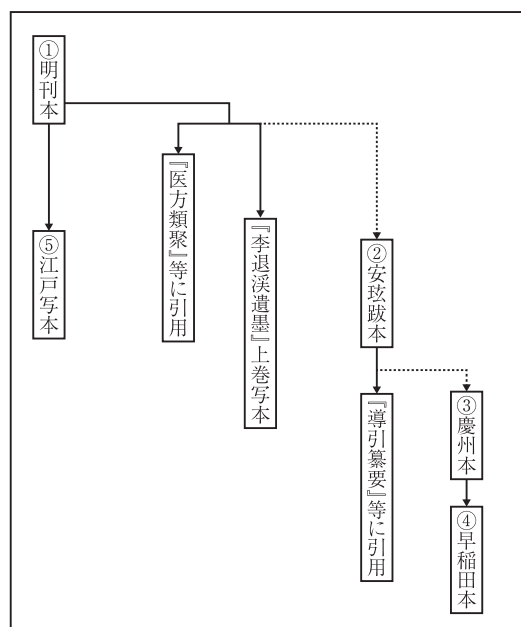


図1 伝播関係

おわりに

最後に本稿で得られた知見をまとめたい。筆者は各地に散在している『活人心』を集め、五系統に分類、整理した。そして刊刻地域、蔵書印、序

文跋文等にもとづき、それぞれの性格を明らかにした。これらの文献の刊刻時期、引用内容を検討し、『活人心』の伝播経路を素描した。また朝鮮と日本で著されたさまざまな養生文献を収集し、『活人心』を引用している文献の分析を行なった。さらに、独自の本文をもつ②安竑跋本と③慶州本の内容を検討し、これらの本が現地の臨床医学の知見を取り入れつつ成書されたという経緯を推定した。

また、流布状況・受容実態を検証する作業を通して、朝鮮と日本で広く読まれていた本書は、二つの国のあいだでかなり異なった受容のされ方をしていたことが判明した。いかなる階級の人びとに読まれ、どのような医学書に引用されたのかということは、各地域の思想形態や医学文化の影響を強く受けた結果だと考えられる。そして、異なった受容のされ方に注目し、朝鮮と日本におけるそれぞれ養生思想の展開を明らかにするためには、この本の受容者についてさらなる検討を加える必要があり、これは今後の課題にしたい。

付言しておくが、諸版本関係性についての検討及び校勘の結果によって、①明刊本以外、少なくとももう一つ明刊本が当時に存在する可能性が考えられるが、それについて他稿で詳述する。

注

- 1) 葉明花(2009)『朱権医薬養生文献研究』(北京中医薬大学)第二章第三節「朱権医薬養生著作概況」他、『中国古医籍整理叢書』シリーズ(2005 中国中医薬出版社)の第二十冊として本書の標点本『活人心法』が出版されている。その中で校勘された版本は二種の朝鮮本(②朝鮮安竑跋本、③朝鮮慶州本)にとどまり、内容までは検討されていない。
- 2) 三木栄(1956)『朝鮮医書誌』第二部 中国医書の朝鮮版二五一頁、朝鮮医書類の日本版、該関係書三七五頁
- 3) 江戸写本についてはその性格がややことなるため、ここでは刊本のみを対象として校勘が行った。
- 4) 真柳誠(2003)「東アジア所在の医薬古典籍」(第四回海外所蔵日本資料データベース会議)
<http://square.umin.ac.jp/mayanagi/paper02/EastAsiaMedDoc.html>
 観海堂本: 観海堂は楊守敬の蔵書室号。彼は明治一三—一七年に来日、蒐集した古書籍三万余

- 巻を携えて帰国した。一九一五年に守敬が没した後、觀海堂藏書は民国政府に買い上げられ、松坡図書館（のち北京図書館に移管）と集靈園に分蔵。さらに（集靈園本が？）北京の故宮博物院に収蔵された。故宮はのち上海・南京・重慶と国民党政府の移動に従い、一九四九年には台湾へ移転され、一九六八年より台北の故宮博物館に収蔵されている。
- 5) 三木栄前掲書二五一頁 嘉靖廿年刊本（成實堂文庫蔵）
 - 6) 『朝鮮王朝実録』（1971）明宗実録卷一二 二六葉オ（国史編纂委員会）
上御朝講。知經筵事鄭士龍曰：声楽，所以奏假於神明者，楽必諧和而後神降之福。今鍾磬，遺失刳缺豈可以此而能致神明之来格乎。昔朴堧知遇於世宗，創制樂器，因旧而校正，雖今人，猶可以為之。安珪計慮精明，若命其事，則必能自挾其僚属而与之同事矣。又有生員趙晟者，自少有疾，不求仕宦，精於医業，律呂，算数之学，若令為之，則固無不能矣。医業之事，尤無通曉之人，趙晟又能精通於医術。若優其廩給，而遴選医司之聡敏可学者，率以教之，則豈無名医之出乎。伝曰：趙晟，律呂，医業，算法，無不通云。付軍職，俾專教誨。鍾石磬刳缺者，亦令晟校正修改，以右參贊安珪，兼掌檢挙。
 - 7) 『朝鮮王朝実録』中宗実録卷一〇五 一九頁 ウ
上不豫。政院問安，伝曰：予証以下氣不通，故尚未差愈，然當自差，勿問安。藥房提調啓曰：自上命勿問安，而未安，故敢問安。臣等多見疴証，雖証勢暫差，而下道少通，此後當益加調治。臣等全不知医術，兵曹參議安珪精於医術，聞見博而所驗異於常医，請於藥房常仕同議。伝：知道。
 - 8) 三木栄前掲書，二五二頁
筆者未見で，詳細は知りえないが，整版で半島初刊本と推定さる。
 - 9) 『한국민족문화대백과사전（韓國民族文化大百科事典）』（1991-1995 韓國精神文化研究院）
Encyclopedia of Korea culture <http://encykorea.aks.ac.kr/Contents/Item/E0051128>
 - 10) 富士川游（1904）『日本医学史』（裳華房）三九〇頁 第八章徳川氏初世ノ医学本道（内科）曲直
 - 瀬正琳
 - 11) 井上隆明（1998）『近世書林板元総覧』（青裳堂書店）七七〇頁 山本五兵衛 京寺町通三条上ル本能寺前 富士野往来 慶安5 頭書大益節用集
 - 12) 『直齋書録解題』卷十三（1978 上海古籍出版社）三九〇頁
朝奉郎直秘閣吳興朱肱翼中撰。以張仲景傷寒方論，各以類聚，為之問答。本號無求子傷寒百問方，有武夷張藏作序，易此名。仲景，南陽人。而「活人」者，本華陀語也。肱，祕丞臨之子，中書舍人服之弟，亦登進士科。
 - 13) 使用版本『医方類聚』（1981 湖北省中医研究所・湖州中医院校，人民衛生出版社出版）
 - 14) 『退溪先生文集』（1993 韓國文集編纂委員會）卷八「擅棄豊基郡守推考臧答状庚戌正月（一五五〇）」第三冊六頁
矣身病在心脏，輾転深痼，自壬寅・癸卯年始同上 卷八「辞免司憲府執義啓 壬子五月二十六日（一五五二）」第三冊七頁
小臣素有虛勞心氣之疾，自癸卯・甲辰年以後，病勢益深。
 - 15) 『李退溪遺墨 活人心方』は上溪光明堂に収められている。大きさは約 45.5×29.5 cm と大本で，退溪学研究院によって影印本が出版されている。影印本には李家源氏『「活人心」解題』が掲げられている。
以上の情報は，影印本と『「活人心」解題』に基づいて整理した。現在，韓國国立中央図書館，延世大学校，檀国大学校，韓國学中央研究院には影印本を蔵している。
 - 16) 同上 李家源『「活人心」解題』
 - 17) 三木栄『朝鮮医学史及疾病史』（1955）第三編第三節「国外との医業交渉」一七頁
 - 18) 『江戸時代書林出版書籍目録集成』（1692 慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編，井上書房）
①：四二頁・三，九一頁・三，一三九頁・一，一九四頁・一，二八四頁・一，②：三七頁・四，一〇九頁・三，一八六頁・五，二八八頁・三，二八八頁・四，③：四一頁・二。

附録 明刊本（底本）第一冊全33丁 第二冊全32丁 半面8行（序文半面5行）

第一冊（上巻）から				
葉行	底本	安菰跋本	慶州本	早稲田本
1丁オ1行目	活人心序	臞仙活人心序	安菰跋本と同じ	臞仙活人心法序
1丁オ3行目	太乙氏	大乙氏	底本と同じ	底本と同じ
1丁オ4行目	而修長生久視之道	修長生久視之道	底本と同じ	底本と同じ
1丁ウ1行目	有巢氏博生咀華以和氣血	巢氏博生咀華以和氣血	安菰跋本と同じ	安菰跋本と同じ
1丁ウ5行目	大樸既散	太樸既散	底本と同じ	底本と同じ
2丁ウ5行目	血氣昏亂	底本と同じ	血脈昏亂	慶州本と同じ
3丁ウ1行目	編為上下兩卷	底本と同じ	底本と同じ	編為上中下三卷
3丁ウ4行目	豈小補哉	豈少補哉	底本と同じ	底本と同じ
3丁ウ4行目	然世之醫書	然之世醫書	底本と同じ	底本と同じ
4丁ウ2行目	文字なし	前南極沖靈妙道真君臞仙書	安菰跋本と同じ	安菰跋本と同じ
5丁オ1行目	活人心卷上	新刊京本活人心法上卷	活人心法上卷	臞仙活人心法上卷
5丁オ3行目	而能療人之心	底本と同じ	而能察人之心	慶州本と同じ
5丁オ4行目	預使不致於有疾	底本と同じ	底本と同じ	預使不致於有病
5丁オ8行目	鮮無不驗	鮮無不驗焉	底本と同じ	底本と同じ
6丁オ4行目	積惡過多	積惡多過	底本と同じ	底本と同じ
6丁オ7行目	是謂病生於心	於是病生於心	底本と同じ	底本と同じ
7丁オ4行目	言喜則咲	底本と同じ	言喜則咲	底本と同じ
7丁オ6行目	則精泄致若驚悸	底本と同じ	底本と同じ	則精泄致若驚悸
7丁ウ2行目	一切妄念	底本と同じ	底本と同じ	一切忘念
7丁ウ5行目	終日營為	底本と同じ	於日營為	慶州本と同じ
7丁ウ6行目	生死皆是一夢	死生皆是一夢	底本と同じ	底本と同じ
8丁オ2行目	本於天地立心	本為天地立心	底本と同じ	底本と同じ
8丁ウ5行目	中和湯	底本と同じ	保和湯	慶州本と同じ
9丁ウ2行目	連祖不拘時候	連祖查不拘時候	安菰跋本と同じ	安菰跋本と同じ
10丁オ3行目-4行目	タイトルなし	底本と同じ	六字訣	慶州本と同じ
11丁ウ4行目	且年老之人	底本と同じ	且年老人	慶州本と同じ
11丁ウ6行目	視其寢處	底本と同じ	視寢處	慶州本と同じ
11丁ウ7行目	有穴當其腦戶	底本と同じ	有穴當腦戶	慶州本と同じ
13丁オ6行目	不問老少	不問老幼	安菰跋本と同じ	安菰跋本と同じ
13丁ウ1行目	毋暴怒	底本と同じ	底本と同じ	毋或進
13丁ウ1行目	保致和，禁嗜欲	底本と同じ	底本と同じ	毋致和，節嗜欲
13丁ウ4行目	食之即目眼爛	食之即目爛	食即目眼爛	慶州本と同じ
14丁オ2行目	入室宜避之	底本と同じ	宜避之	慶州本と同じ
14丁オ7行目	命長存	命得長存	安菰跋本と同じ	安菰跋本と同じ
14丁ウ2行目	用舌掛上腭	用舌柱掛上腭	安菰跋本と同じ	慶州本と同じ
15丁オ3行目	氣宜精鍊	底本と同じ	票宜精鍊	慶州本と同じ
16丁ウ6行目	榮衛昏亂	榮胃昏亂	安菰跋本と同じ	安菰跋本と同じ
17丁オ3行目	二十四度聞	底本と同じ	二十四度間	慶州本と同じ
17丁オ3行目右	熱兩手	底本と同じ	移兩手	慶州本と同じ
17丁オ5行目	神水滿口	底本と同じ	腎水滿口	慶州本と同じ
17丁オ7行目	閉氣搓手熱	底本と同じ	閉氣握手熱	慶州本と同じ
17丁オ8行目右	腰後外腎也	底本と同じ	腰外腎也	慶州本と同じ
17丁ウ1行目左	即用後法	底本と同じ	即後法	慶州本と同じ
17丁ウ4行目左	同前法	同煎法	底本と同じ	底本と同じ
17丁ウ7行目右	遍燒身體想時口及鼻	遍燒身仕想時口及鼻	遍燒身存想時口及鼻	慶州本と同じ

附録 明刊本（底本）第一冊全 33 丁 第二冊全 32 丁 半面 8 行（序文半面 5 行）（続き）

17 丁ウ 7 行目左	皆閉氣少頃	底本と同じ	皆閉少頃	慶州本と同じ
20 丁オ 2 行目	以數多更妙	底本と同じ	以數多妙	慶州本と同じ
23 丁ウ 2 行目	急瀝咽	底本と同じ	急可咽	慶州本と同じ
25 丁ウ 6 行目	亦可及手着凍拋射左右	底本と同じ	亦可及手着凍拋射左右	慶州本と同じ
26 丁ウ 1 行目	入胃存胃神承之	入胃使胃神承之	底本と同じ	底本と同じ
27 丁ウ 1 行目	死則拍捐	底本と同じ	死則相捐	慶州本と同じ
28 丁オ 7 行目	薯蕷酒	底本と同じ	薯預酒	
28 丁ウ 1 行目	煩熱強陰	底本と同じ	底本と同じ	除煩熱強陰
29 丁オ 1 行目	用白麵拌之	用白曲拌之	安玟跋本と同じ	
29 丁オ 2 行目	和血注顏	底本と同じ	和血駐顏	安玟跋本と同じ
29 丁オ 4 行目	有糯米	底本と同じ	用糯米	慶州本と同じ
29 丁オ 5 行目	連汁與飯同拌要勻	連汁與飯同拌勻	底本と同じ	底本と同じ
29 丁オ 5 行目	放下白麵候熟但空心之飲一盃	用白麵三兩和二十七日熟空心飲一盃	底本と同じ	底本と同じ
30 丁オ 8 行目	刷洗去鯉穢	底本と同じ	底本と同じ	刷洗去醒穢
30 丁ウ 3 行目	似熟芋	底本と同じ	底本と同じ	以熟芋
31 丁オ 2 行目	以匙揉碎	底本と同じ	底本と同じ	以匙揉研
31 丁オ 3 行目	候粥熟投	底本と同じ	底本と同じ	候粥熟後
31 丁ウ 4 行目	用花椒	底本と同じ	用椒	慶州本と同じ
31 丁オ 7 行目	用重湯慢火煮只候軟爛	底本と同じ	用重湯慢火煮熟候軟爛	慶州本と同じ
3 丁オ 8 行目	令竹簌簌住	底本と同じ	令竹簌住	慶州本と同じ
第二冊（下巻）から				
1 丁オ 1 行目	活人心卷下	新刊京本活人心下卷 玄洲道人涵虛子 編	活人心下卷	活人心中卷
1 丁オ 7 行目	配類二氣	底本と同じ	類二氣	慶州本と同じ
1 丁オ 8 行目	乃水火既濟之方	底本と同じ	乃水火既濟沸方	慶州本と同じ
1 丁ウ 2 行目右	一兩二味相和作丹	底本と同じ	底本と同じ	一兩二味相和為丹
1 丁ウ 4 行目右	水澄過二兩淨	水澄過一兩淨	水澄二兩淨	慶州本と同じ
1 丁ウ 4 行目右	去白二兩	去白一兩	底本と同じ	底本と同じ
2 丁オ 5 行目	去木二兩	去木一兩	底本と同じ	底本と同じ
2 丁オ 7 行目	桐子大	梧桐子大	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
2 丁オ 7 行目	每服二十九丸	每服二十九	底本と同じ	底本と同じ
2 丁オ 8 行目	用去心麥門冬湯送下	去心麥門冬湯送下	底本と同じ	底本と同じ
2 丁ウ 1 行目	用炒酸棗仁湯送下	用炒酸棗仁湯吞下	底本と同じ	底本と同じ
3 丁オ 5 行目	去蘆洗焙干一兩半	去蘆焙干一兩	去蘆焙干兩半	慶州本と同じ
3 丁オ 7 行目	用糯米濃飲為劑	用糯米濃飯為劑	底本と同じ	底本と同じ
3 丁ウ 4 行目	至誠修製	至誠修劑	底本と同じ	底本と同じ
4 丁ウ 2 行目	如圓小分作兩服	如圓水分作兩服	底本と同じ	底本と同じ
4 丁ウ 7 行目	太陽疼	太陽疼	底本と同じ	底本と同じ
5 丁ウ 1 行目	白附子半兩	底本と同じ	白附子	慶州本と同じ
6 丁オ 6 行目	臨發時空心服一丸	臨時發空心服一丸	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
6 丁ウ 5 行目	白膠香一兩半各研	底本と同じ	膠香兩半各研	慶州本と同じ
6 丁ウ 6 行目	五靈脂	五靈脂研		
6 丁ウ 6 行目	木鼈字各一兩半正槌去油毒	底本と同じ	木鼈字各一兩半槌去油毒	慶州本と同じ
7 丁オ 7 行目	好酒入瓷器罐內	底本と同じ	酒好入瓷器罐內	慶州本と同じ
7 丁ウ 3 行目	小茴香四兩去枝梗微炒香為末	小茴香四兩去皮梗香末	小茴香四兩去皮梗微炒末	慶州本と同じ

附録 明刊本（底本）第一冊全 33 丁 第二冊全 32 丁 半面 8 行（序文半面 5 行）（続き）

7 丁ウ 4 行目	右藥末和勻用好紅棗不拘多少湯蒸大爛皮肉相離撈起剝去皮核研為細膏加好酒入前藥和劑作圓切勿私用麵糊米飲之類其藥不靈圓如梧桐子大曬乾透心空心溫酒下五十九初服可日進三服久上進一服	右為末用紅棗二十粒蒸爛皮肉相離撈起剝去皮核研為膏加好酒入藥和劑作圓切勿用麵糊米飲之類圓如梧桐子大曬乾透心溫酒空心吞下五十九初服日進三服久後止進一服	右藥末和勻用好紅棗不拘多少湯蒸大爛皮肉相離撈起剝去皮核研為細膏加好酒入前藥和劑作圓切勿私用麵糊米飲之類其藥不靈圓如梧桐子大曬乾透心空心溫酒下五十九初服可日進三服久上進一服	慶州本と同じ
8 丁オ 4 行目	人參兩錢甘草一錢	人參甘草各一錢	人參一錢甘草一錢	慶州本と同じ
8 丁オ 5 行目	枳殼？兩去穢麵炒	枳殼一兩去穢麵炒	枳殼二兩去穢麵炒	慶州本と同じ
8 丁オ 6 行目	豆豉一兩？過	豆豉一兩	豆豉一兩○過	慶州本と同じ
8 丁オ 7 行目	右九味為細末	右九味為末	底本と同じ	底本と同じ
8 丁オ 7 行目	候夜晴時露過	候清夜間露過	底本と同じ	底本と同じ
8 丁オ 8 行目	調糊作餅	調米糊作餅子	底本と同じ	底本と同じ
8 丁ウ 1 行目	切忌諸般生冷	切忌諸般生冷腥味	底本と同じ	底本と同じ
8 丁ウ 3 行目	夜遺	夜遺夢泄	夜秘遺	慶州本と同じ
8 丁ウ 5 行目	靈砂水飛	靈砂水飛過	底本と同じ	底本と同じ
8 丁ウ 5 行目	龍骨火煨飛各一兩酒煮焙乾為末亦可	龍骨火煨飛各二兩酒煮焙乾為	龍骨火煨各一兩酒煮焙乾為末亦可	慶州本と同じ
8 丁ウ 8 行目	臨臥熱水下	臨臥熱湯下	底本と同じ	底本と同じ
9 丁オ 6 行目	玉露丹	底本と同じ	玉露丹	慶州本と同じ
9 丁ウ 1 行目	白龍丹粘舌者九蒸九暴為末	底本と同じ	白龍丹結實者九蒸九暴為末	白龍丹結實者九蒸九暴為末
9 丁ウ 1 行目	菟絲子酒浸焙乾別研	菟絲子酒浸焙乾用別研	菟絲子酒浸焙乾	慶州本と同じ
9 丁ウ 3 行目	煉密為丸	煉密丸	底本と同じ	底本と同じ
9 丁ウ 3 行目	每服十丸	每食前服十丸	每十丸	底本と同じ
9 丁ウ 4 行目	初服忌房事	初服忌房事餘下同	底本と同じ	底本と同じ
9 丁ウ 5 行目	食前服玉露丸食候服金鎖丹	この句、無し	安珰跋本と同じ	安珰跋本と同じ
9 丁ウ 7 行目	肉蓯蓉五兩去皮切作片子酒浸研為膏	肉蓯蓉五兩去皮切作片子酒浸搗為膏	肉蓯蓉五兩去皮切作片子酒浸○為膏	肉蓯蓉五兩去皮切作片子酒浸為膏
9 丁ウ 8 行目	黑附子二兩炮製去皮研	黑附子二兩炮去皮研	黑附子二兩炮製去皮	慶州本と同じ
10 丁オ 1 行目	胡桃三十個	胡桃二十個	底本と同じ	底本と同じ
10 丁オ 2 行目	搗勻各三物同為細末入前蓯蓉膏和勻	搗勻同前藥為細末卻入蓯蓉膏和勻	底本と同じ	底本と同じ
10 丁オ 1 行目	服經月餘	底本と同じ	服月餘	底本と同じ
11 丁オ 2 行目	乾薑湯下	薑湯下	底本と同じ	底本と同じ
11 丁オ 3 行目	頭疼	頭痛	底本と同じ	底本と同じ
11 丁オ 4 行目	乾薑湯送下	薑湯送下	底本と同じ	底本と同じ
11 丁オ 6 行目	巴豆七個去皮不去油	巴豆七個去皮又去油	巴豆七個去皮去油	慶州本と同じ
11 丁オ 7 行目	白草霜二錢	白草霜一錢	底本と同じ	底本と同じ
11 丁ウ 1 行目	另研	別研	底本と同じ	底本と同じ
11 丁ウ 1 行目	用香油二錢	用香油三錢	底本と同じ	底本と同じ
12 丁オ 8 行目	汗出速效	頓服汗出速效	底本と同じ	底本と同じ
12 丁ウ 2 行目	咽喉堵塞	咽喉閉塞	安珰跋本と同じ	安珰跋本と同じ
12 丁ウ 3 行目	川芎四錢	無此句	安珰跋本と同じ	安珰跋本と同じ
12 丁ウ 4 行目	麝香二分	麝香一分	底本と同じ	底本と同じ
12 丁ウ 5 行目	右為末	右為細末	底本と同じ	底本と同じ
12 丁ウ 5 行目	冷水一點	底本と同じ	冷水兩點	慶州本と同じ

附録 明刊本（底本）第一冊全 33 丁 第二冊全 32 丁 半面 8 行（序文半面 5 行）（続き）

13 丁オ 1 行目	用好鴨嘴	底本と同じ	底本と同じ	用好鴨嘴
13 丁オ 1 行目	膽内陰乾為末吹入喉中 立效	底本と同じ	膽内陰乾為末吹入喉中	この句、無し
13 丁オ 7 行目	用此愈	用此立愈	底本と同じ	底本と同じ
13 丁ウ 7 行目	專治急心疼立效	專治急心疼	專治急心痛立效	底本と同じ
14 丁オ 6 行目	大黃生一兩	大黃生用一兩	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
15 丁オ 3 行目	？皆化	皆花落下	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
15 丁オ 6 行目	用枳殼	枳殼	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
15 丁ウ 8 行目	食後米飲下	食後米飲下立效	底本と同じ	底本と同じ
16 丁オ 3 行目	類火麻	類大麻	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
16 丁オ 8 行目	成癰為末	底本と同じ	或癰為末	慶州本と同じ
16 丁ウ 1 行目	亦可	亦可神效	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
16 丁ウ 8 行目	於瓷器内	瓷器内	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
17 丁オ 1 行目	再用文武火	用文武火	底本と同じ	底本と同じ
17 丁オ 3 行目	入土埋七日	底本と同じ	埋土七日	慶州本と同じ
17 丁オ 3 行目	每用銅筋少許	每用筋少許	底本と同じ	底本と同じ
17 丁オ 4 行目	俟藥性過	候藥性過	安玟跋本と同じ	底本と同じ
17 丁オ 6 行目	膏藥神授東華益？膏	底本と同じ	神授東華益？膏治一切 惡瘡	慶州本と同じ
17 丁オ 7 行目	遇一老人而授之	底本と同じ	遇一老夫而授之	慶州本と同じ
17 丁オ 8 行目	諸藥不效者	底本と同じ	諸藥不效	慶州本と同じ
17 丁ウ 3 行目	先熬五枝膏	底本と同じ	五枝膏二兩膏法	慶州本と同じ
17 丁ウ 6 行目	各剉碎五升共三斗用長 流水一擔	底本と同じ	剉各五升長流水一擔	慶州本と同じ
17 丁ウ 7 行目	滴水中不散為度	底本と同じ	滴水不散為度	慶州本と同じ
18 丁オ 3 行目	用黃蠟二兩	用黃蠟一兩	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
18 丁オ 4 行目	安息香末五錢黃丹一兩	安息香末黃丹各一兩	安息香末五錢黃丹二 兩	慶州本と同じ
18 丁ウ 6 行目	每三五日一按	每三五日一換	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
18 丁ウ 7 行目	不犯鐵器	不犯鐵器隨時用之立效	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
18 丁末—19 丁		底本と同じ	底本と同じ	臚仙活人心法中卷畢 活人心法下卷
19 丁オ 1 行目	加減靈秘十八方	底本と同じ	底本と同じ	靈秘十八方
19 丁オ 4 行目	水真陰衰虛	水真陰衰憊	水陰陽衰憊	慶州本と同じ
19 丁オ 5 行目	諸潮搗	諸般搗	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
19 丁ウ 2 行目	或頭生肩偏身		或頭生肩偏身	慶州本と同じ
19 丁ウ 6 行目	喘悶○妄驚狂	喘悶者或癲狂	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
20 丁オ 2 行目	或因而熱結	底本と同じ	固因而熱結	
20 丁オ 5 行目	防風川芎當歸芍藥大黃 芒硝連翹薄荷麻黃 不去 節各半兩	底本と同じ	防風一兩川芎一兩當 歸二兩芍藥二兩大黃 一兩半芒硝二兩連翹 一兩半薄荷一兩麻黃 不去節各半兩	慶州本と同じ
20 丁オ 8 行目	石膏桔梗黃芩 各一兩	底本と同じ	石膏一兩桔梗一兩黃 芩 各一兩半	慶州本と同じ
20 丁ウ 1 行目	白朮山梔子荊芥穗 各二 錢半 滑石三兩 甘草二兩	底本と同じ	白朮一兩山梔子一兩 荊芥穗 各五錢半 滑石 三兩 甘草一兩	慶州本と同じ
20 丁ウ 5 行目	為鼓鬱乃痊	為鼓鬱乃痊	底本と同じ	底本と同じ
20 丁ウ 6 行目	脂液所凝	底本と同じ	○液所凝	津液所凝
21 丁オ 6 行目	二錢七麻黃	二錢去麻黃	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ

附録 明刊本（底本）第一冊全 33 丁 第二冊全 32 丁 半面 8 行（序文半面 5 行）（続き）

21 丁ウ 4 行目	羌活末一錢	羌活末一錢可服	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
21 丁ウ 6 行目	腸胃乾燥	底本と同じ	腸胸乾燥	慶州本と同じ
21 丁ウ 8 行目	二錢	二錢服之	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
22 丁オ 6 行目	各二錢	各二錢半服之	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
22 丁ウ 3 行目	立解	立解愈	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
22 丁ウ 8 行目	則辛頰鼻翼	底本と同じ	則○頰鼻翼	慶州本と同じ
23 丁ウ 1 行目	麻黄去節人參黄苓芍藥甘草炙川芎杏仁麵炒去皮尖防已官桂去麋皮各一兩	底本と同じ	麻黄去節人參五錢黄苓芍藥甘草炙五錢川芎杏仁麵炒去皮尖防已官桂去麋皮各一兩	慶州本と同じ
23 丁ウ 7 行目	食前服	食前服立效	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
24 丁オ 1 行目	加黄苓七錢	加黄苓七分	底本と同じ	底本と同じ
24 丁ウ 6 行目	無所不及	底本と同じ	底本と同じ	無不及所
25 丁オ 1 行目	各一兩	各七兩	底本と同じ	底本と同じ
25 丁オ 7 行目	疫癘之疾	癘疫之疾	底本と同じ	底本と同じ
25 丁オ 8 行目	並皆治之	底本と同じ	底本と同じ	並治之
25 丁ウ 1 行目	蒼朮五兩陳皮厚朴姜制各三兩	蒼朮五兩汨浸陳皮去白厚朴姜制各三兩	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
25 丁ウ 2 行目	每服五錢	口父咀每服五錢	底本と同じ	底本と同じ
25 丁ウ 2 行目	棗一枚煎	棗一枚水鍾半煎至七分	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
25 丁ウ 7 行目	不安百節	底本と同じ	底本と同じ	百節不安
25 丁ウ 8 行目	柴胡	柴胡一兩	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
26 丁オ 1 行目	加桑白皮	加桑白皮木通	底本と同じ	底本と同じ
26 丁オ 3 行目	加高良姜	加高良姜白豆蔻	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
26 丁オ 3 行目	酒傷加丁香	酒傷加丁香二錢	酒傷加丁香縮紗各二錢	慶州本と同じ
26 丁オ 4 行目	加肉豆蔻	加肉豆蔻二錢	加肉豆蔻二錢及訶子	慶州本と同じ
26 丁オ 5 行目	加荊芥	底本と同じ	加荊芥細辛	慶州本と同じ
26 丁オ 6 行目	加地骨皮	加地骨皮麥門冬	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
26 丁オ 7 行目	加吳茱萸	加吳茱萸黃蓮去甘藍	底本と同じ	底本と同じ
26 丁オ 8 行目	加藁本	底本と同じ	加藁本白芷	慶州本と同じ
27 丁オ 3 行目	乾姜桂為	乾姜桂皮	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
27 丁オ 5 行目	半夏為不換金正氣散	底本と同じ	半夏如不換金正氣散	慶州本と同じ
27 丁オ 6 行目	加柴胡	加柴胡各五錢	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
27 丁オ 7 行目	加苦練面香	加苦練面香各三錢	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
27 丁ウ 2 行目	或有清穀皆治	或有清穀皆治口噤失音四肢強直刺痛	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
28 丁オ 4 行目	同煎熱服	底本と同じ	同煎	慶州本と同じ
28 丁ウ 5 行目	渴者再於枳實理中湯	底本と同じ	渴者再枳實理中湯	慶州本と同じ
28 丁ウ 7 行目	加官桂一兩半	底本と同じ	加官桂一〇	底本と同じ
29 丁ウ 8 行目	咳嗽者加知母貝母	底本と同じ	咳逆者加知母貝母	慶州本と同じ
30 丁オ 1 行目	加紫苑	底本と同じ	加紫	慶州本と同じ
30 丁オ 8 行目	心胸痞者加枳實	底本と同じ	心胸滿者加枳實	慶州本と同じ
30 丁ウ 8 行目	倦怠少力	倦怠少力小便不利大便秘澀	安玟跋本と同じ	安玟跋本と同じ
31 丁オ 1 行目	黄苓一兩半	底本と同じ	黄苓二兩半	慶州本と同じ

注：「？」は判読不能字。「○」は欠字箇所を表す。

朱權《活人心》在朝鮮和日本的傳播 ——從版本比較入手——

劉

青

京都大学大学院 共生文明学専攻

〒 606-8501 京都市左京区吉田二本松町

論文主旨 明代，出版技術得到了高度發展，除了官刻印書之外，還出現了坊刻和私刻。因此，大量的醫學和養生書得以刊刻，並進入了一般民衆的生活。而在這個時期，中國和朝鮮的醫學交流也十分興盛，很多的醫書在這個時期傳入朝鮮半島。同時，日本的知識分子也爭相引入明代醫學，對明代醫書的翻刻和出版也迎來了新的高潮。可以說，由於明代醫書的傳播，對整個東亞地區醫學的形成和發展，都產生了深遠影響。然而，對於明代醫書，特別是養生書籍在整個東亞醫學史上的定位問題，還十分的不明確。

本論文，試從明初文人，同時也是王室貴族的朱權入手，通過對他的代表性養生著作《活人心》的整體分析，來解決以上問題。首先，作者收集了散存在東亞各地的版本，進行了系統的分類和整理。通過刊刻地，藏書印，序文跋文等信息，來明確各個版本的特點。其次，著眼於朝鮮，日本醫書對《活人心》的引用和藉鑒，通過引用書籍來看本書的受容問題。最後，基於以上兩點，作者試著勾勒出了本書的流傳路徑。另外，對於在當今經常被使用的朝鮮版本，作者特別進行了成書過程的推測。

朱權的思想，可以說為養生史的發展提供了新的方向。因此，通過對此書定位的分析，可以管窺到整個東亞地區養生思想的特徵及發展。然而，對與《活人心》的繼承，以及朝鮮，日本各自區域獨特化的展開，還將作為今後的課題，深入研究。